

栄養士養成課程の学生における食意識変化

Changes in Attitudes for Dietary Habits of Students in Dietitian Training School

樋 口 康 彦

HIGUCHI Yasuhiko

【要約】

栄養士養成課程に在籍している学生における食意識の変化について調べるために、食意識に関する質問紙を作成し、因子分析を行った。その結果、「一般的食行動の因子」と「専門的食行動の因子」に分けられた。入学前と入学後の食意識変化について問う項目について両因子の平均得点の差について t 検定を行った結果、専門的食行動の因子の方が、一般的食行動の因子よりも、有意に得点が高いことがわかった。このことから、栄養士専門課程において専門教育を受けることで、専門的な食行動に対する意識が向上したことがわかった。

キーワード 栄養士 短期大学学生 食意識 教育相談 教育心理

I. 目的

人は様々な教育および経験によって変化していく。そして栄養士養成課程校に在学している学生は日々、栄養学、食品学、衛生学といった講義系の科目や調理学実習、献立作成実習などの実習系の科目を履修することを通じて食物や栄養に関する知識・経験を積み重ねている。

こういった教育を受けることは学生の心理にどのような変化をもたらすのだろうか。これは非常に重要かつ興味深いテーマである。そこで本調査では栄養士養成課程の学生における、食行動に関する意識の変化について調査することにした。

II. 方法

(1) 調査時期 2016 年 11 月 25～28 日。

(2) 調査協力者 短期大学の食物栄養学科 1 年生 76 名、2 年生 42 名、計 118 名(女性:115 名、男性:3 名)。

(3) 調査方法 調査対象者にアンケート用紙を配布し、その場で回答を求め、回収した。

(4) 質問項目の構成

①入学前と入学後の食意識変化について問う項目 過去の研究を参考に、「農薬に気を付ける」「調理器具の菌を増やさないようにする」など食の安全に関する項目を 5 つ、「野菜を多く

食べる」「旬のものを食べる」など栄養に関する項目を5つ、「欠食をしない」「好き嫌いをなく食べる」など食行動に関する項目を5つ、「挨拶(いただきます等)をする」「姿勢よく食べる」などマナーに関する項目を5つ、合計で20項目作成した。(表1参照)

そして、「食事についてあなたは富山短期大学入学前と入学後を比べてどのくらい変化しましたか。当てはまる番号に○をつけてください」という教示を与えた後、非常に変化した(5点)、少し変化した(4点)、わからない(3点)、あまり変化していない(2点)、全く変化していない(1点)の5件法で回答するよう求めた。

②食についてどのようなことをどの程度子どもに伝えたいかについて問う項目 ①と全く同じ項目に「あなたにも子どもができたなら次のようなことをどの程度伝えたいですか。」という教示を与えて回答を求めた。非常に伝えたい(5点)、少し伝えたい(4点)、わからない(3点)、あまり伝えたくない(2点)、全く伝えたくない(1点)の5件法。

③フェイスシート 性別、学年、年齢を質問した。

Ⅲ. 結果と考察

分析1 入学前と入学後の食意識変化について問う項目の因子分析

表1 入学前と入学後の食意識変化について問う項目の因子分析および平均値・標準偏差

項目内容	因子負荷量		意識変化		子どもに伝えたい	
	I	II	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
6 正しい箸の持ち方をする。	843	516	2.25	1.49	4.79	0.6
16 咀嚼音を立てない。	831	482	2.36	1.52	4.69	0.72
1 挨拶(いただきます等)をする。	806	402	2.28	1.49	4.82	0.55
20 行儀よく食べる。	768	563	2.88	1.54	4.75	0.63
7 朝食を欠かさずに食べる。	755	519	2.56	1.64	4.64	0.74
15 欠食をしない。	724	556	2.36	1.52	4.53	0.87
3 野菜を多く食べる。	717	595	2.86	1.48	4.7	0.63
12 姿勢よく食べる。	820	681	2.5	1.49	4.62	0.79
9 魚を適度に食べる。	813	694	2.55	1.41	4.4	0.76
14 農産物に気を付ける。	769	640	2.26	1.27	4.08	1.01
2 好き嫌いをなく食べる。	644	536	2.52	1.42	4.62	0.79
13 旬のものを食べる。	570	770	2.9	1.37	4.14	0.96
19 調理器具の菌を増やさないようにする	399	761	3.35	1.43	4.21	0.91
18 塩分の摂りすぎに注意する。	390	730	3.3	1.33	4.47	0.81
10 野菜・果物をきれいに洗う。	540	729	3.1	1.45	4.41	0.79
17 必要なときは自分で作る。	551	718	3.34	1.49	4.38	0.79
8 食品の添加物に気を付ける。	523	702	2.57	1.31	3.92	1.02
5 バランスよく食べる。	607	815	3.13	1.36	4.61	0.75
11 よく噛んで食べる。	719	747	2.82	1.48	4.65	0.7
4 食品の産地に気を付ける。	644	719	2.5	1.27	3.98	1.02

質問項目の構造を確かめるため、実際に因子分析を行った。全ての概念(対象者)を混みにして236行(食育2カテゴリー[自分の食意識変化、子どもに伝えたいか]×被験者数118)に対し尺度間の因子分析を行った。

まず計20項目の相関マトリックスを求め、それに基づいて主成分法による因子分析を行った。スクリーテストの結果を参考に因子数を2に定め、因子負荷行列をバリマックス法、

斜交プロマックス法によって回転した。解釈に当たっては斜交プロマックス解を採用した。結果は表 1 に示す通りである(小数点省略。以下同)。

項目選択の際は、因子負荷量が.7 以上で他の因子に対する負荷量が.6 以下であることを基準とした。

第 I 因子 第 I 因子には項目「6. 正しい箸の持ち方をする」「16. 咀嚼音を立てない」「1. 挨拶(いただきます等)をする。」等の項目が高い付加を示している。この因子に高い付加を示している項目からは一般的な食行動に関する概念が共通して見て取れる。そこで「一般的食行動の因子」と命名した。

第 II 因子 第 II 因子には項目「13. 旬のものを食べる」「19. 調理器具の菌を増やさないようする」「18. 塩分の摂りすぎに注意する。」等の項目が高い付加を示している。この因子に高い付加を示す項目からは、あまり一般家庭では気にしないような食についての専門的事項に関する概念が共通して見て取れる。そこで「専門的食行動の因子」と命名することにした。

質問項目作成の際には、食の安全、栄養、食行動、マナーという 4 つのカテゴリーに分けて項目を作成したのだが実際に因子分析をしてみると食に関する一般的な事柄を問う項目と、食に関する専門的な事柄を問う項目の 2 つに分かれたことは非常に興味深い結果と言える。

分析 2 意識変化について問う項目および子どもに伝えたいかについて問う項目の t 検定

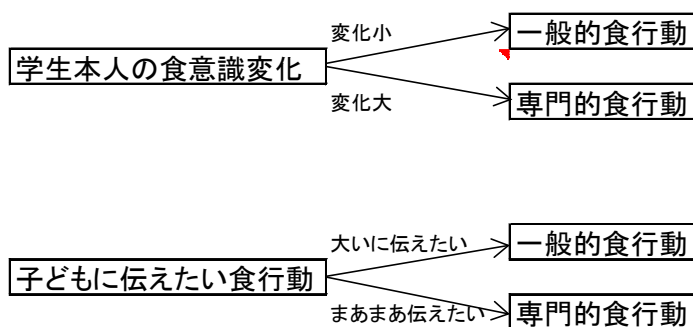


図1 食意識変化

入学前と入学後の食意識変化について問う項目と食についてどのようなことをどの程度子どもに伝えたいかについて問う項目の平均値および標準偏差を求めた。(表 1 右側参照)

その結果、まず入学前と入学後の食意識変化について問う項目に関しては、概して第 I 因子の項目よりも第 II 因子の項目の方が、得点が高いように見受けられる。そこでそのことを確かめるために第 I 因子の 7 項目の得点の平均値(平均値=2.52、標準偏差=1.2)と第 II 因子の 6 項目の得点の平均値(平均値=3.09、標準偏差=1.05)についてデータに対応がある場合の t 検定を行った。その結果、項目の平均値の差は統計的に見て有意であった。t (117)

=6.48、 $p < 0.01$ 。

つまり食に対する意識の変化としては一般的な食行動よりも専門的食行動の変化の方が大きかった。これは専門教育の効果が表れ、食に対する専門的知識を学ぶにつれてそのことに対する意識が高まった結果であると言える。

質問項目①と②は教示の文は異なっているが、質問項目の内容は同じである。そこで、②の一般的因子 7 項目の平均得点(平均値=4.70、標準偏差 0.57)と専門的食行動 6 項目の平均得点(平均値=4.25、標準偏差=0.73)について t 検定を行った。その結果第 II 因子よりも第 I 因子の得点の方が大きいことがわかった。 $t(117)=9.8$ 、 $p < 0.01$ 。この結果は、栄養士養成課程の学生は自分の子どもに対して専門的な食行動よりも、一般的・常識的な食行動について伝えたいと思ひ、また身につけてほしいと思っているということを示している。

教育心理、教育相談の観点から言うと、自分の子どもは食に関する専門家の道を進むかどうかかわからないので、あまり専門的なことよりもごく常識的なことをまず身に付けてほしいと思っているのだと解釈できる。

なお、以上の結果は図 1 のようにまとめられる。

IV. まとめ

栄養士養成課程に在籍している学生における食意識の変化について調べるために、食意識に関する質問紙を作成し、因子分析を行った。その結果、「一般的食行動の因子」と「専門的食行動の因子」に分けられた。入学前と入学後の食意識変化について問う項目について両因子の平均得点の差について t 検定を行った結果、専門的食行動の因子の方が、一般的食行動の因子よりも、有意に得点が高いことがわかった。このことから、栄養士専門課程において専門教育を受けることで、専門的な食行動に対する意識が向上したことがわかった。

食についてどの程度子どもに伝えたいかについて問う項目について両因子の平均得点の差について t 検定を行った結果、一般的食行動の因子の方が専門的食行動の因子よりも有意に得点が高いことがわかった。このことから、自分の子どもに対しては専門的な食行動よりも一般的・常識的な食行動について伝えたいし、身につけてほしいと思っているということがわかった。

【参考文献】

若松法代 2012 大学生の食生活実態と食育の課題 滋賀大学大学院教育学研究科論文集, 15, 131-136.

上村芳枝 畠山唯 山崎初枝 森田清美 2013 小学生時の食育が女子学生の食生活状況・自覚症状に及ぼす影響 比治山大学短期大学部紀要, 48, 59-71.